

季節の伝統植物 [春]

伝統の桜草

2021年4月13日(火)～5月5日(水・祝)

● 国立歴史民俗博物館

日本のサクラソウは、江戸時代に作りだされた古典園芸植物の中でも重要な位置を占めています。江戸時代の中頃、野生のサクラソウの中から探し出された変わり花をもとにして、多数の品種が作り出され、ピーク時には300を超える品種が記録されています。

サクラソウと縁の深い仲間をまとめてサクラソウ属 (Primula) と呼んでいます。日本にはこの仲間は14種が自生しており、日本で園芸植物となっているものには、サクラソウ (P. sieboldii) のほかに湿地を好むクリンソウ (P. japonica) があります。クリンソウは西欧で絶賛され、多数の品種が作りだされましたが、サクラソウは、海外に進出してゆくことはありませんでした。それは、それまでに作りだされた品種の花びらが、一重の単弁で、玉咲や垂咲といった特色をもつものだったからです。丈が高いものや八重咲を好む西欧の人々の目には、それらの特徴は単に劣った性質にしか映らず、日本文化の中のこうした美意識が理解されなかったのでしょう。

サクラソウが文献に最初に登場するのは1665(寛文5)年に出版された『きんもうずい訓蒙図彙』で、クリンソウとともに掲載されています。この頃からサクラソウは園芸書にはふつうに見られるようになり、1695(元禄8)年に出された総合的な園芸書である『かだんちきんしょう花壇地錦抄』にも、花色の異なる二つの系統が収められています。

江戸時代後期にかけてはたくさんの品種が作りだされ、文化・文政期 (1804～1830)、安政期 (1854～1860) 頃には流行のピークを迎えていたようです。

サクラソウの園芸文化を支えたのは、旗本を中心とする武士階級だったようで、同好会にあたる「連」を作り、技術や品種の優秀さを競う「とうかかい闘花会」などが盛んに催されました。

サクラソウは、花や葉など植物全体の野生味ある姿が観賞できるように、専用の鉢に植え込みます。すでに述べたように、サクラソウは単弁で、どの品種も背丈が同じくらいなので、多くの品種を一堂に集めてそれらの色彩や花形の変化、またその組み合わせを観賞します。このような総合的な美しさを楽しむために考案されたのが「桜草花壇 (段飾り)」という観賞法で、多くの古典園芸植物の中でもサクラソウのためだけに開発されたものです。5段の花壇に33鉢、あるいは38鉢、6段の花壇に43鉢を並べて観賞したことが記録に残っています。

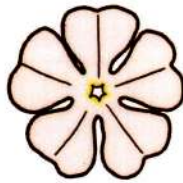


● 復元された「桜草花壇」による展示

✿ 花弁の形



標準弁
サクラの花に似ている花弁。



広弁
花弁の幅が広く花弁間のすきまのない花弁。



細弁
花弁の幅の狭い花弁。



重ね弁
花弁が重なり合う。

✿ 花の咲き方



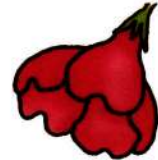
平咲き
花が平たく、野生型。
(駒止、朝日など)



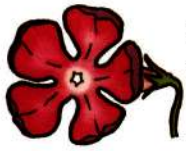
梅咲き
花が梅のように先端が極端に内曲し、袋状になるもの。
(臥竜梅、紫光梅など)



玉咲き
花弁が強く曲がりこんで、玉のようなになるもの。
(玉孔雀、白珠など)



つかみ咲き
手で物をつかむような型になるもの。
(木枯、神通力など)



抱え咲き
花弁の先が内へ曲がり、物を抱えるようなもの。
(紫雲の重、宇宙など)



星咲き
抱え咲きで花弁の先が内側に折れ曲がるもの。
(青海原、人丸など)



狂い咲き
抱え咲きで花弁が波打つもの。
(伊達男、岩戸神楽など)

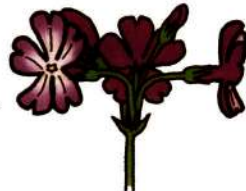


獅子咲き
狂い咲きでひだの大きいもの。
(大力無双、獅子奮迅など)

✿ 花冠の向き



受け咲き
花が上を向いて咲く。野生品種・小輪花に多い。

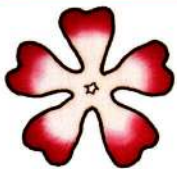


横向き咲き
花が横に向いて咲き、花が花茎の周囲をとりまくように咲く。中輪花に多い。



垂れ咲き
花が大きく垂れ下がって咲く。大輪花に多い。

✿ 花色の表現



うちしろ
内白



めなが
目流れ



そこしろ
底白



めしろ
目白



あけぼのしろ
曙白



ほけめ
刷毛目

✿ 花弁の先端の形



丸弁



桜弁



元細弁



梅弁



微かがり弁



かがり弁



深かがり弁



波打ち弁